

中国語を母語とする日本語学習者の 空間表現「上・下・中」と助数詞の過剰使用

稲葉 みどり (愛知教育大学日本語教育講座)

(2003年11月28日受理)

Overuse of Japanese Expressions for Space and Counters by Chinese Native Speakers

Midori INABA (Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education)

要約 中国語を母語とする日本語学習者の空間表現「上・下・中」、及び、助数詞の使用について、日本語初級から上級までの日本語学習者の口頭作話を分析し、その問題点を考察した。その結果、日本語では通常用いない場合でも頻繁にこれらの表現を用いること、省略可能な場合でも使用する傾向があることが明らかになった。原因として、類似した言語表現が母語（中国語）にもあるため、その用法の過剰般化の可能性が挙げられる。過剰使用は上級でも見られることから、日本語教育においては、日本語学習の様々な段階で、日本語と中国語の用法の差異を念頭においた指導が必要であると考えられる。

Keywords : 空間表現、助数詞、過剰使用

1. はじめに

本稿では、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語母語学習者）の日本語発話を分析し、その問題点を探り、より自然な日本語を身につけるために必要な指導上の留意点を明らかにする。ここでは、初級、中級、上級レベルの学習者の発話資料の中で、特に過剰使用が見られた、1) 空間、場所、方向等を表す表現「～の上・～の下・～の中」、(以下、空間表現「上・下・中」)、及び、2) 助数詞について考察する。

空間表現「上・下・中」や助数詞は、類似した言語表現が母語（中国語）にあるため、中国語母語学習者にとっては、母語での使い方の影響を受けやすい項目であると考えられる（張, 2001）。これらの用法は、日本語と中国語では微妙に異なっているため、その区別の習得には、適切な指導や学習が必要である。

本稿では、中国語母語学習者による口頭作話（物語文）を言語資料として、その中で用いられている空間表現「上・下・中」と助数詞を、日本語で1) 必要な場合、2) どちらでもよい場合、3) 必要ではない場合に分けて考察し、誤用や問題点を明らかにする。

特に、空間表現「上・下・中」の用法は、前にくる名詞の意味・性質や後にくる動詞の意味・性質だけでなく、文脈にも関わると考えられる。よって、本稿では、物語文という筋書きのあるコンテキストを設定し、文脈も考慮にいれて、その使用実態を明らかにすることにする。また、この物語の同じ場面において、日本語母語話者が該当する表現を用いているかどうかを基準にして、中国語母語学習者の言語表現の使用の妥当性、問題点等を考察する。

2. 言語資料

2.1 被験者

被験者は、中国語母語学習者6名で、調査時、日本の大学の学部生、及び学部研究生である。発話資料の収集と同時に実施した基本文法テストの得点¹、学習歴等を参考に、6人の被験者を初級(得点率6割未満)、中級(得点率9割未満)、上級(得点率9割以上)の3つの日本語力のレベルに区分した(下記の表参照)。この基本文法テストは、日本語能力試験3級~2級程度で、主に初級、中級の学習者のレベルを測定する目的で作成されている。よって、このテスト結果では中級と上級の間あまり大きな得点の差は見られないが、A-a、A-bの2名は日本語能力試験の1級を合格していることから、上級に区分した。

表：被験者のレベル区分

被験者 コード	レベル 区分	文法テスト	
		75問中の 得点率 (%)	出身国
E-a	初級	59	中国
E-b	初級	57	中国
I-a	中級	89	中国
I-b	中級	89	台湾
A-a	上級	93	中国
A-b	上級	98	中国

また、日本語を母語とする成人（以下、日本人話者）10名からも同じ絵本を用いて口頭の物語文を収集した。

2.2 口頭作話

分析する発話資料は、「Frog, Where Are You? (かえるくん、どこにいるの?) (Mayer, 1969)」という文字のない絵本を用いて収集した口頭作話である。この物語は24ページで構成され、主人公の少年と犬がいなくなってしまったペットのカエルを探しに森へ出かけ、途中でいろいろな出来事に遭遇しながら、最後にカエルと見つけるという筋書きである。

発話資料の収集は、まず全頁の絵を見て物語の筋を把握してから、次に最初の頁に戻り、再び絵本を見ながら口頭で物語を語るという手順で行った。単語が分からなくて作話ができない状況を回避するために、物語に登場する動物名、物などの最低限の語彙リストを付けた²。口頭作話は録音し、それを書き起こしたものを分析した。

3. 空間表現「上・下・中」の使用実態

3.1 「～の上」「～の下」の過剰使用

まず、方向や場所、位置関係を表す「～の上」「～の下」の使用について考察する。同じ場面、類似の表現で日本人がこれらの表現を用いているかどうかを参考にし、「～の上」「～の下」を以下の3つの場合に分類して、使用実態を分析することにする。

- 1) 通常用いるもの、または、文脈上必要なもの
- 2) 使用してもしなくてもよいもの
- 3) 通常用いないもの、または、文脈上必要ないもの
(使っても誤用にはならないが、不自然な日本語になる場合も含む)

はじめに、「～の上」「～の下」が日本語で通常用いられるもの、または、文脈上必要と考えられるものについて、見てみよう。

例-1³、例-2では、「～の上」が男の子のいる場所を示すために用いられている。事物の具体的な場所、位置関係を示すために「～の上」は必要であり、この使い方に問題はない。

例-1 男の子は大きい岩の上に立って、カエルをよんで、... [C-E-a; S14]⁴

例-2 急に男の子は岩の後ろの鹿の魚の上にいます。 [C-E-b; S15]

例-3、例-4では、「～の下」は方向を示している。「～の下」がないと池の位置や、見る方向が特定できず、ここで用いるのは適切である。

例-3 ... 男の子と犬をはしの崖の下にある池の中に投げました。 [C-A-b; S17]

例-4 鹿は崖の下に見えます。 [C-E-b; S18]

以上から、具体的な場所、位置関係、方向等を表す

場合については、使用上、特に問題はないようである。

次に、「～の上」「～の下」を使用してもしなくてもよい場合を見てみよう。場所、方向、位置関係を示すには、基本的には「～の上」「～の下」を用いるが、使わなくても十分意味が伝わる場合は、省略可能である。

例-5では、「岩の上に登って」も、「岩に登って」も可能で、意味に大差はない。しかし、例-1、例-2で見たように、同じ「岩の上」でも、それが存在や行動の場所の場合には、「上」が必要である。ここでは、後ろに「登る」という動詞があるため、「上」はなくても意味が十分伝わる。「登る」は、すでに「上へ」という方向性を含んでいるからである。この場合、大半の日本人は「～の上」を用いていないが、中国語母語学習者の多くの場合は用いる傾向が見られた。

例-5 男の子は岩の上に登って、カエルをよんでいきます。 [C-E-b; S14]

例-6を見てみよう。「角にのせて」でも十分意味が通じ、ここでも「～の上」は省略可能である。これは、後続の動詞「のせる」が、すでに「上に」という意味を含んでいるからであろう。このように、「～の上」を使うか使わないかは環境により、微妙に異なることが分かる。

例-6 鹿は男の子を自分の角の上にのせて、逃げました。 [C-I-a; S15]

例-7の方向を表す「～の下」も省くことが可能である。この場合、日本人話者は「下に」よりも「崖から落とす」というような表現を用いている。これは、「落とす」という動詞がすでに下にという意味を含んでいるため、特に「～の下」を用いる必要はないからであろう。

例-7 ... 崖の下に落としてしまいました。 [C-A-a; S17]

次に日本語では通常用いないもの、または、文脈上必要ない場合にも、中国語母語学習者が「～の上」「～の下」を用いている例を見てみよう。ここでは、使っても必ずしも誤用とは言えないが、不自然な日本語になる場合も含めて考察することにする。

まず一番頻度の高かったのは、例-8、例-9のような場合である。ここで穴というのは、木の洞のことで、木の幹に穴が開いている状態を指す。このような場合、日本語では、通常「木の上に穴がある」とは言わない。これに対して、中国語では、「上」に表面を表す用法がある (張, 2001a, b; 荒川, 1997) ことから、

このような表現をしたのではないかと考えられる。この種「～の上」の使い方は、「～の上」の誤用の中で一番頻度が高く、初級から上級までのすべての学習者に見られた。

例-8 ... 木の上にも穴があります。[C-I-a; S11]

例-9 男の子は木の上に穴があるのを見つけて、...
[C-A-b; S11]

例-10のような場合も、日本語では通常「～の上」を用いない。ここでは、犬の頭が瓶の中に入った状態を表したもので、ものの周りを表す場合には、日本語では「～の上」は用いない。中国語では、「首の上にスカーフを巻いている」のように、接触する周囲にも「上」を用いる用法がある（張, 2001a, b）ので、その影響ではないだろうか。

例-10 犬の頭の上の花瓶はブローク。[C-E-b; S7]

次に例-11を見てみよう。ここでは、特に木の上の方の枝とか下の方の枝を指すなど、特に上を特定しなくてもよい場合を除いては、「～上」を用いる必要はない。この表現は必ずしも誤用とは言えないが、省いても意味が十分伝わる。日本人話者は「木から落ちました」のように表現している。特に後続する動詞「落ちる」にすでに上から下へという方向性を示す意味があるので、かえて「～の上」を用いると不自然な印象を与えるように思われる。このような使い方中国語母語学習者には多く見られた。中国語では、移動の起点や到達点を表す場合にも、「本が本棚の上から落ちた」のように「上」が用いられる（張, 2001a, b）ので、その影響ではないだろうか。

例-11 男の子はびっくりしたので、木の上から落ちました。[C-I-a; S12]

以下のような場合（例-12～14）にも「～の上」の過剰使用が見られた。どれも通常「～の上」とは言わない。

例-12 すると、森の中の木の上のハチの巣から...
[C-A-b; S3]

例-13 木の上にハチの巣があります。 [C-E-b; S8]

例-14 犬は木の上のハチの巣を見えています。
[C-E-b; S9]

以上、中国語母語学習者の使用した「～の上」「～の下」について考察した。中国語母語学習者の発話資料では、「～の上」「～の下」が非常に多く用いられていた。また、中国語母語学習者と日本人話者とは、

これらの表現の使用方法に違いが見られた。過剰使用は初級から上級まで6人すべての学習者に見られ、発話全体の量が多い上級の学習者ほど頻繁に使用していることが明らかになった。これらの表現の過剰使用は、母語（中国語）の用法を過剰般化したためではないかと考えられる。

3.2 「～の中」の過剰使用

ここでは、空間、場所を表す空間表現「～の中」の使用について分析する。「～の中」が必要かどうかは、基本的には前にくる名詞の性質による。「～の中」の前にくる名詞に場所や行動の場所を表す意味が含まれていない場合は、それを明示的に示すために「～の中」が必要である。しかし、前にくる名詞に容器、行動の場所などの意味が含まれている場合は、「～の中」を用いなくても意味が通じるので、省略が可能である（張, 2001a, c）。また、文脈上、場所を特定する必要がある場合には、前にくる名詞の性質に関わらず用いられると考えられる。

よって、ここでは、以下の3つの観点から、中国語母語学習者の「～の中」の使用を考察することにする。

- 1) 通常用いるもの、または、文脈上必要なもの
- 2) 使用してもしなくても、どちらでもよいもの
- 3) 通常用いないもの、または、文脈上必要ないもの

まず、日本語で通常用いるもの、または、文脈上必要であると考えられるものについて中国語母語学習者がどのように用いているかを見てみる。

例-15では、カエルを探している場所を具体的に示すために「～の中」を用いている。基本的には、存在や行動の具体的な場所を表す場合は、「中」が必要である。「長靴」を「足を入れるもの」という意味で用いれば、「長靴の中に／長靴に足を入れる」のように「～の中」を用いても、用いなくてもよいと考えられる。しかし、ここでは、「長靴」という名詞には、探す対象となる場所を表すので、「～の中」が必要であり、ここで用いるのは適切である。

例-15 男の子は長靴の中にカエルを探しています。
[C-E-b; S4]

例-16では、存在の場所を示すために「～の中」が必要である。先行する名詞が「庭」など、場所を表す意味を含む場合は、「犬は庭に／*庭の中にいます」のように「～中」を用いると不自然になる場合がある。しかし、「水」という名詞には、場所を表す意味は含まれていないので、「～の中」を用いた下記の表現に問題はない。

例-16 犬は水の中にいます。[C-E-b; S20]

例-17では、「瓶」は容器を表す名詞なので、通常は「～の中」はなくてもよいが、ここでは、文脈から必要である。この場面は「瓶の中にいたカエルが、夜の間に瓶から抜け出し、次の朝少年が瓶を見ると、瓶が空っぽになっていた」という物語の発端部分である。したがって、「瓶の中」ということを明示的に述べる必要があり、ほとんどの日本人がここで「～の中」を用いており、これも適切な使い方と言える。

例-17 また瓶の中にはカエルが入っていました。
[C-A-b; S1]

次に「～の中」を使っても使わなくてもよい場合について考察する。「～の中」があってもなくても、意味は十分伝わり、あまり意味に大きな違いもない場合である。

例-18、例-19では、「～の中」を用いても用いなくてもよい。「ハチの巣の中」にハチがいて、そこからハチが出てくることは十分予測可能なので、あえて「～中」を用いなくても意味が通じる。この場合、中国語母語学習者の大半は「～の中」を用いているが、日本人は省く傾向にある。

例-18 ハチの巣の中からハチがでました。
[C-E-b; S12]

例-19 ... ハチの巣の中のハチが飛び出していました。
[C-A-b; S3]

例-20では、先行する名詞「瓶」が容器であること、文脈から、カエルが瓶の中にいたことはすでに明らかであり、動詞「出る」が後続していること等から、「～中」を省いても意味が明確であると考えられる。大半の日本人話者は「～の中」を省いているが、中国語母語学習者の多くは用いている。

例-20 カエルは瓶の中から出ました。[C-E-a; S3]

例-21では、「森」が場所を表す意味を持つ名詞であることから、「～の中」は用いなくてもよいが、中であることを特定するのなら、用いても誤りとは言えない。この場合も、日本人話者は、「～の中」を省いているが、中国語母語学習者は用いる傾向が強い。

例-21 森の中にはハチの巣があります。[C-I-b; S8]

最後に、日本語では「～の中」を通常あまり用いない場合を見てみよう。「～の中」を用いても、必ずしも誤用となるわけではないが、不自然な日本語になるので、日本語話者がほとんど用いてない場合である。

先ず、例-22を見てみよう。「部屋」には、存在、

場所、人間が行為を営むことができる空間という意味があるので、特定の場合を除いて「～の中」は必要ない。例えば、「部屋の外には大きな木があり、部屋の中には男の子とカエルがいる」というような対照を表す場合には必要である。しかし、この場面は、物語の冒頭の部分で、文脈上特に「～の中」を特定する必要がないので、単に「部屋には」としている日本人話者が大半である。

例-22 この部屋の中には、男の子と犬とカエルがいます。[C-E-b; S1]

例-23でも、先行する名詞「ベッド」は、その中で寝るための空間を表すので、文脈上特定する必要がある場合や対照を表すような場合を除いて「～の中」を用いない方が自然である。

例-23 男の子と犬はベッドの中で寝ています。
[C-E-b; S2]

例-24、例-25では、文脈上、「森の中」を特定する必要はないので、単に「森に探しに行く」という表現で十分と考えられる。日本人話者で用いている人はないが、中国語母語学習者の多くは「森の中」という表現を用いている。

例-24 男の子と犬と一緒に外に出て、森の中に探しに行きました。[C-A-a; S8]

例-25 男の子と犬は森の中に行って、カエルくんを探しています。[C-I-b; S8]

例-26では、名詞「庭」は通常、場所を表す空間なので、基本的には「～の中」は用いる必要はない。

例-26 ... 犬も庭の中に飛び込んで、カエルを一生懸命探しましたが... [C-A-a; S4]

例-27の場面では、日本人話者は「～の中」を用いてない。この場合「池」は、投げる方向（場所）を示し、動作や行動を行う場所ではないから「の中」を用いないのではないか。

例-28 ... 男の子と犬をはしの崖の下にある池の中に投げました。[C-A-b; S17]

ただし、次の男の子と犬が池の中にいる場面（S19）では、「～の中」の中を用いている日本人話者（例-29）も見られ、先行する名詞が同じでも、「～の中」を使った方が自然かどうかは、状況により微妙に異なることが分かる。

例-29 池の中に落ちてしまった男の子と犬は...
[C-A-b; S19]

次に日本語と中国語の空間を表す表現の用法の違いによると考えられる誤用を紹介する。例-30のような言い方は日本語ではあまり一般的でない。これは、物語の最後の場面で、男の子が手のひらの上に一匹のカエルをのせている場面である。この場面では、「手の(平の)上に/手に」の方が自然である。

例-30 男の子の手の中にカエルがひとついます。
[C-E-b; S24]

日本語では平たい容器の場合、一般に「皿の上」のように「～の上」を用いる。中国語の場合は、容器が平たくても、「お盆の中に…」のように、「里(日本語の「中」に相当する語)」を用いる(張, 2001a, c; 荒川, 1997)。ここで「～の中」を用いたのは、その影響ではないかと考えられる。

例-31において、中国語母語学習者は「～中」を用いた表現をしているが、日本人話者は「穴にはフクロウが住んでいました」等の別の表現を用いている場合が多い。

例-31 この大きい穴の中はフクロウのうちです。
[C-E-a; S11]

以上、中国語母語学習者の空間表現「～の中」の使用について考察した結果、過剰使用が認められた。過剰使用は、初級から上級までのすべての学習者に見られた。日本人話者の場合、「～の中」は場所を明示する必要があるときにのみに限られている。しかし、中国語母語学習者の場合は、空間を使った表現が非常に多いのが日本語表現の特徴と言える。中国語では、場所を表す「里」は日本語よりより広く用いられるので、日本語の「～の中」を過剰般化して用いる傾向にあるのではないかと考えられる。

4. 助数詞の多用傾向

ここでは、助数詞の使用について考察する。助数詞は、日本語にも中国語にもあるが、その種類や用法には微妙な違いがあり、誤用の原因となる。また、助数詞の位置も日本語と中国語では異なる点があるので学習、指導上注意を要する。ここでは、助数詞について、以下の3つの観点から考察することにする。

- 1) 通常用いるもの、または、文脈上必要なもの
- 2) 使用してもしなくてもよいもの
- 3) 通常用いないもの、または、文脈上 unnecessaryなもの

本調査の場合、助数詞の過剰使用は、特定の中国語母語学習者のみに見られた。助数詞を過剰使用してい

るのは、上級の中国語母語学習者のうちの一人である。日本語のレベルはかなり高く、日本に1年以上滞在経験を持っている。過剰使用は、特に「一+助数詞」に見られ、「一匹」「一本」「一つ」などの語句が日本語では不要と思われるカ所にも用いている。

まず、助数詞の中で、日本人話者も用いているものを見てみよう。例-32は、少年が一匹のカエルをもって帰る物語の最後の場面(S24)である。ここでは、数を特定して述べるのが物語の内容上自然であると思われる箇所で、日本人10人中7人が数(一匹)に言及している。

例-32 男の子は一匹のカエルの子どもを持って、もとのカエルと残りの子どもとバイバイと言って、そのカエルの子どもを持って、犬と家に帰りました。[C-A-a; S24]

次に、助数詞を用いても、誤りとは言えないが、日本人話者はあまり用いてない場合を見てみよう。例-32~35では、それぞれ「一+助数詞」が用いられているが、この文脈では、特に数を特定する必要はないので、助数詞は不要である。事実、このような助数詞の使い方は、日本人話者の言語資料には見られない。しかし、この中国語母語学習者はこのような使い方助数詞を頻繁に使用している。

例-32 この時、男の子が地上に一つの穴があることに気がつきました。[C-A-a; S5]

例-33 木の枝の上に一つのハチの巣がかけていて、犬はあれが何とっていて、飛び上がってよく見ました。[C-A-a; S9]

例-34 そのとき、男の子がそばにある大きな木の上に一つの大きな穴があることに気づきました。[C-A-a; S11]

例-35 池の水辺に一本の大きな木がありました。
[C-A-a; S20]

また、物語の冒頭の部分では、例-36のように3回助数詞を用いている。日本人話者の場合、「カエル」については10人中2名が「一匹」を用いている(例-37)が、「男の子」と「犬」に助数詞を用いた日本人話者はひとりもいなかった。

例-36 ひとりの男の子と一匹の犬と一匹のカエルと一緒に仲良く暮らしています。[C-A-a; S1]

例-37 ある日小さな男の子と犬が森へ行き、カエルを一匹つかまえてきました。[J-20-d; S1]

助数詞を用いるかどうかは、基本的には話者の表現意図、スタイルなどによる。特にここで見られたよう

な使い方をすると、日本語では、文学的な色彩を持つ表現になる。しかし、この言語資料では、そのような表現スタイルで口頭作話をした日本人話者はほとんど見られなかった。

次に、日本語では、通常必要ないと考えられるものについて見てみよう。例-38では、特に「一つ」という助数詞を用いる必要はない。この文脈では、カエルが一匹であることはすでに前の場面から明らかで、この話者も物語文の冒頭で例-36のように述べている。よって瓶の数を明示するのは不自然である。実際に日本人話者の言語使用でも、瓶の数を特定したものは見られなかった。

例-38 カエルはいつも一つの瓶の中にいます。
[C-A-a; S1]

最後の助数詞位置についても見てみよう。日本人話者と中国語母語学習者とは、異なる傾向が見られた。両者が助数詞を用いている場面を例にとりて比較してみよう。中国語母語学習者の場合、例-39（再掲）の「一匹のカエル」というように連体修飾的な用法で用いている。

例-39 男の子は一匹のカエルの子どもを持って、もとのカエルと残りの子どもとバイバイと言って、そのカエルの子どもを持って、犬と家に帰りました。[C-A-a; S24]

一方、同じ場面を語った日本人話者の7人中6人は、例-40のように、「一匹もらって」というような連用修飾的な用法で使用している。

例-40 男の子はマイケルの子どもを一匹もらって帰っていきました。[J-20-I; S24]

これまでに挙げた例でも、「ひとりの男の子」「一匹のカエル」「一つの穴」「一本の木」など、助数詞を名詞の前に用いている。すなわち、中国語母語学習者の場合、使われている助数詞のほとんどすべてが連体修飾的に用いられていることが分かる⁵。日本語では、助数詞や数詞句を連用修飾的に用いることもできるが、中国語では、数詞句は連体的にしか使われないので、この発想の影響ではないかと考えられる。

以上、中国語母語学習者の助数詞の過剰使用について考察した。ここでは、上級の学習者1名にその過剰使用の傾向が強く見られたことから、助数詞の使用に関しては、個人差があることが示唆される。

5. まとめ

本稿では、中国語母語学習者の発話資料を、空間表

現「上・下・中」、及び、助数詞の使用について、日本語で用いられる場合、どちらでもよい場合、使わない場合、に分けて考察した。その結果、空間表現については、日本人話者が通常用いない場合でも用いていることが明らかになった。また、省略が可能な場合、日本人話者の多くは省いていたが、中国語母語学習者は使用する傾向が見られた。誤用の原因として、中国語の「上・下・里（日本語の「～の中）」の用法の過剰般化が考えられる。

助数詞の過剰使用に関しても、中国語の転移ではないかと考えられる。中国語の「一+助数詞」は、英語の不定冠詞「a/an」の文法機能に似ているところがあり、英語の不定冠詞ほど義務的ではないが、頻繁に使われる（張, 2001a）。よって、過剰使用してしまうのではないかと考えられる。中川・李（1997）は、中国語の名詞の複数説を唱え、中国語では、「一+助数詞」がなければ、名詞は複数に解釈され、それをさけるために助数詞を用いるのではないかと述べている。中国語母語学習者が日本語にもこの概念を持ち込んだとしたら、助数詞の多用は十分予測できる。

さらに本稿では、これらの空間表現や助数詞の使用が、文脈にも深く関わっていることが明らかになった。単文レベルの考察では、空間表現の前にくる名詞の性質で「上・下・中」を用いるかどうかが決まると考えられている。しかし、本稿で見てきたように、前にくる名詞が同じでも、後ろにくる動詞の意味や性質によって、「上・下・中」が必要かどうか決まる場合もある。また、省けるかどうかも前後の文脈に依る。

空間表現「上・下・中」の過剰使用（誤用を含む）は、初級の学習者に限ったことではなく、上級までのすべてのレベルに見られることが判明した。本稿で研究の対象とした上級の学習者は、日本語能力が非常に高く、母国では熟練した日本語教師も含まれている。しかし、表現が精緻化すればするほど過剰使用は顕著に見られた。また、助数詞の過剰使用（誤用を含む）も、上級の学習者に見られ、これらの表現の正しい用法の習得が、それほど容易ではないことを示唆している。

第二言語習得の観点から考察すると、母語の転移は、言語知識の十分でない初級レベルで起こるとは限らず、中級、上級レベルで、より精緻な言語表現をしようとした場合にも起こる。空間表現「上・下・中」の過剰使用は上級になっても見られ、化石化の可能性も考えられる。

6. 日本語教育への示唆

分析の結果から、中国語母語学習者は、空間表現「上・下・中」、及び、助数詞を過剰使用することが明らかになった。これは、日本語で、1) 通常用いるもの、2) どちらでもよいもの、3) 通常用いないもの、

の区別が十分に習得されていないからであろう。これらの表現は使い方を誤っても、多少不自然に感じる程度で、一見正しいように思われることもある。よって、誤用であることを見逃してしまったり、これ以外の日本語の問題点や誤用への対処を優先してしまう可能性もある。上級の学習者になっても過剰使用や誤用が見られる原因の一つには、まわりから適切な指導や助言が得にくいことも関わっているのではないだろうか。

しかし、より自然な、高いレベルの日本語を習得する上で、これらの表現を正しく使えるようになることは非常に重要である。日本語指導にあたって、まずに留意すべき点は、誤用を防ぐことである。日本語と中国語の用法の差異を分かりやすく説明し、特に、日本語では通常用いない場合に過剰使用しないように指導する。また、これらの表現がどのような場合に省略できるかを十分に把握できるように指導することも必要である。使用してもしなくてもよい場合、使っても誤りではないから取り立て指導の必要がないと考えるのではなく、省略したほうが日本語らしい場合もあること念頭において指導すべきであろう。

本稿から得られた結果は、非常に限られた数の被験者を対象としたものであり、物語文というコンテキストにおける空間表現、助数詞の使用実態を分析したものである。よって、今後さらに多くの被験者を対象とした分析や、別のジャンルの発話資料を用いた研究が必要である。

謝 辞

この研究のために、発話資料の収集に協力して下さった被験者の方々に感謝します。

注

- 1 「外国人のための日本語能力認定試行試験」試験 BセクションIII、問題1～5の75問を使用。この試験は、1983年に東南アジア9カ国2地域で実施され、テストの基本統計、各問の難易度、識別度、信頼性等が村上(1989)、林(1991)で分析され、問題とともに公開されている。
- 2 語彙リストは名詞のみで、動詞、助動詞などは一切含まない。語彙力の発達を対象とした研究ではないので、影響は少ないと思われる。
- 3 本稿で取り上げる中国語母語学習者の発話例には、分析の対象とする項目以外にも、誤用や不自然な点を含んでいる場合があるが、そのまま抜粋することにする。
- 4 []内は、被験者コード、及び、場面番号(S)を表す。
- 5 張(2001a)でも中国語母語学習者が助数詞の連体修飾的な用法を用いることが指摘されている。

参考文献

- 荒川清秀.(1997).「日本語名詞のトコロ(空間)性—中国語との関連で」.大河内康憲編『日本語と中国語の対象研究論文集』pp.71-94.くろしお出版
- 張鱗声.(2001a).『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例』スリーイーネットワーク
- 張鱗声.(2001b).「日本語の『(の)上』と中国語の『上』の異同をめぐって」明治書院『日本語学』1月号. pp.95-116.
- 張鱗声.(2001c).『『(の)中』の基本的意味とその分布について』『日本語教育』108号, pp.51-59.
- 中川正之・李俊徹.(1997).「日中両国語における数量表現」.大河内康憲編『日本語と中国語の対象研究論文集』pp.95-116.くろしお出版
- Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?*. New York: Dial Press.

資 料

発話資料1：CODE [C-A-a]

ひとりの男の子と一匹の犬と一匹のカエルと一緒に仲良く暮らしています。カエルはいつもひとつの瓶の中にいます。ある日、男の子と犬が寝ている間にカエルは瓶の中から飛び降りて、出てしまいました。朝起きて男の子と犬がそのいつものとおりにその瓶の中を見たら、あれ、カエルはいなくなりました。どこにいったんだろう。で、探し始めました。男の子はその長靴を、(ひっ)くりかえし、上から底まで見て探しました。犬は頭を瓶の中に入れて、よく見てたんですが、やはり、カエルはいませんでした。で、男の子はとってもあわてて声をかけました。「カエル、カエルどこにいるの」と呼びかけましたが、犬も庭の中に飛び込んで、カエルを一生懸命探しましたが、どこにもカエルの姿はありませんでした。で、そこで犬が庭に飛び込んだ時に、瓶にぶつかってしまって、瓶は割れてしまいました。それで、男の子におこられてしまいました。でも、犬はやっぱりかわいいから、なおしました。男の子と犬と一緒に外へ出て、森の中に探しに行きました。木の枝の上に一つのハチの巣がかけていて、犬はあれが何と想着いて、飛び上がってよく見ました。その中にあるハチがびっくりしちゃって、外に飛び出しました。犬はびっくりしました。男の子もびっくりしました。この時、男の子が地上に一つの穴があることに気がつきました。もしかしたら、カエルはこの穴の中にいるかもしれないと思っていて、ほおり始めました。でも、穴から出てきたのはカエルではなく、ネズミさんでした。男の子はがっかりしました。そのとき、男の子がそばにある大きな木の上に一つの大きな穴があることに気づきました。すぐに男の子が木に登って、その中をぞのみこみました。そこから飛び出したのは、フクロウでした。男の子はびっくりしちゃって、木からころんでしまいました。犬もこわがって逃げました。男の子は犬がいなくなったから、また犬を探し始めました。岩の中にのぼって、高いところに立って、大声でさげび始めました。犬は岩の下に身をかくしましたが、その時に大きな鹿が来て、この男の子は鹿の角にかけられてしまいました。鹿がおどろいてしまって、一生懸命逃げ出してしまいました。犬はそれを見て、鹿を追いかけてきましたが、そのとき、男の子も犬も崖の下に気がつかない間に崖の下に落ちてしまいました。崖の下は川(池)があります。犬と男の子はこの池の中に降りました。でもこの池の水はうすいですから、大丈夫でした。池の水辺に一本の大きな木がありました。犬はほえましたが、男の子がカエルはこの木の中にいるかもしれないと思って、犬にはほえるなど言いました。男の子と犬はその木の下をのぞいたら、本当にカエルがいました。しかも、たくさんのカエルの子どももいました。この時、男の子が

ふうっとわかりました。カエルが子どもをうみにこの池に来ました。カエルも自分の生活、自分なりの生活がしたいなあとわかりました。男の子は一匹のカエルの子どもを持って、もとのカエルと残りの子どもとバイバイと言って、そのカエルの子どもを持って、犬と家に帰りました。

発話資料2：CODE [C-A-a]

ある夜のことで、部屋の中には男の子と犬がいました。また瓶の中にはカエルがはいっていました。男の子と犬は瓶の中のカエルをじっと見つめていました。もう遅くなったので、男の子は眠くなったので、もう寝てしまいました。その時、カエルは瓶の中から飛び出して、どこかに逃げてしまいました。朝男の子が目さめてみると、瓶の中のカエルがどこかに逃げてしまったので、びっくりしました。で、男の子はカエルが長靴の中に入っているのかと思って、長靴の中を見ました。でもぜんぜんカエルは見つかりませんでした。男の子は急いで窓をあけてカエルを呼びました。犬も瓶の中に首をつっこんで、カエルを呼んでいました。でも何回も何回もカエルを呼んでいましたが、見つかりませんでした。すると瓶の中に首をつっこんでいた犬のせいで瓶が落ちてしまいました。そして、瓶がこわれてしまいました。男の子と犬は急いで森に向かって走って行きました。で、森に向かって男の子も犬もカエルを呼びました。すると、森の中の木の上のハチの巣から、男の子の声が大きかったので、ハチの巣の中のハチが飛び出してしまいました。男の子は木の下に穴があるのを見つけたので、その穴の中を、穴を見つめました。すると、その穴の中から、ネズミが出てしまいました。犬は木の上のハチの巣を...。男の子は木の上に穴があるのを見つけて、木に登って、穴の中をのぞいて見ました。すると、その穴の中から、フクロウが飛び出してしまいました。びっくりした男の子は、木の上から落ちてしまいました。男の子は木の下に岩があったので、岩の上に登って、またカエルを呼びました。実は岩のむこうには、鹿がいました。男の子が岩に登っていると、ちょうど鹿の角にのりましました。で、鹿は男の子をのせてどこかに走って行きました。それで、走って崖の所まで行って、男の子と犬をはしの崖の下にある池の中に投げました。すると、男の子と犬は池に落ちてしまいました。池の中に落ちてしまった男の子と犬は池のくこうに木が横になっているのを見つけました。で、木のむこうから、何かカエルのなっている声が、何か声が聞こえたので、犬に静かにするように合図をしました。で、木にのぼって、犬と男の子は木にのぼって、むこうの方を見ていると、向こうには、カエルがなっていました。すると、たくさんのカエルが集まって来ました。男の子は喜んでカエルと自分のカエルを手の上に乗せて、犬と一緒にうれしそうに家へ帰りました。